

救急搬送傷病者等の意識調査結果

東京消防庁消防科学研究所
第 四 研 究 室

1. はじめに

平成元年の東京消防庁管内における救急出場件数は昭和63年よりも約1万3千件増加し、37万8,205件に達し、都民30人に1人が救急車を利用したことになる。このような状況下において、その救急事象を適切に処置し、安全かつ迅速に、傷病者を救急医療機関に搬送するにあたっては、傷病者・救急隊員の相互理解と信頼感に基づくことが大切である。そこで、本調査は傷病者・救急隊員双方の意識を把握するためのアンケートを実施して、救急活動及び救急資器材等が心理面に及ぼす影響等について分析し、より効率的な救急活動と救急資器材等の改良に反映させるものである。

2. 調査概要等

(1) 調査期間

平成元年9月29日から同年10月31日まで

(2) 調査区域

東京消防庁管轄区域内

(3) 調査対象救急隊 10隊

(4) 調査対象者

調査対象救急隊（以下「救急隊」という。）が搬送した傷病者または関係者（以下「傷病者等」という。）及び対応した救急隊員。傷病者等の選定にあたっては年代別、職業別に

ついて均等配布できるように留意した。

(5) 調査方法

原則として各当番日を午前、午後、夜間（22時から翌朝6時まで）の3区分とし、各調査区分において救急隊が搬送した傷病者1人に対してアンケート用紙を配布し、返信用封筒を用いて回収した。同時にアンケートを配布した救急事象に対して救急隊員には救急隊員用アンケートを実施した。

(6) 調査対象救急件数

500件

(7) 傷病者等アンケート有効回答者数

337人（回収率67.4％）

（内訳 傷病者83人・関係者254人）

(8) 調査対象救急隊員

延べ1,500人

（内訳 隊長・隊員・機関員各500人）

(9) 標本構成

表1はアンケート回答者を傷病者本人と関係者とに分類したもので、関係者の回答が多い。

表1 傷病者との関係

	傷病者本人	関係者	計
実数 (人)	83	254	337
比率 (%)	24.6	75.4	100.0

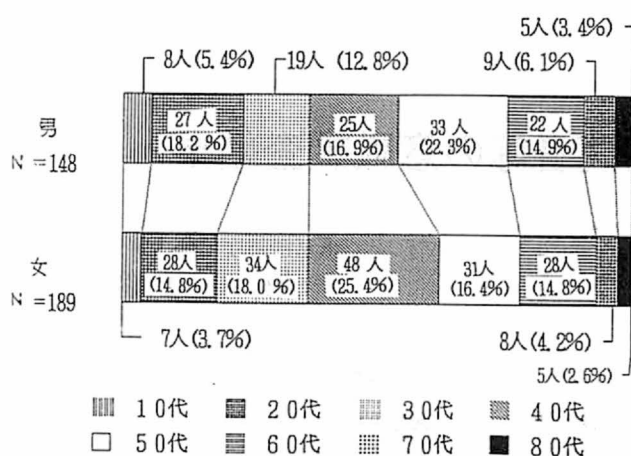


図 男女別年齢構成

表 2 初診時程度別

	重症以上	中等症	軽 傷	計
実 数 (人)	29	143	165	337
比 率 (%)	8.6	42.4	49.0	100.0

図はアンケート回答者の男女別年齢構成を示したもので女性が若干多い。

表 2 は傷病者の初診時程度別に回答者を示したもので、軽傷者が165人で最も多い。

3. 分析結果の概要

(1) 救急隊到着までの傷病者等の意識

ア 通報から到着までの時間

表 3 は、救急隊が通報から現場到着までに要した実際の時間と、傷病者等の回答した時間とを比較した結果を示したものである。現場到着に要した実際の時間よりも長く感じていた者は、短く感じていた者よりも多く、救急車を待っている者は実際の時間よりも長く感じていることが認められる。

イ 到着時の気持ち

表 4 は、「救急車が到着した時の気持ちに

表 3 通報から到着までの時間 (回答時間—実時間)

	実際の時間より短い回答		実際の時間と同じ回答	実際の時間より長い回答		計
	- 3 分以上	- 2 分以内	± 0 分	+ 2 分以内	+ 3 分以上	
実 数 (人)	70		45	222		337
	20	50		137	85	
比 率 (%)	5.9	14.8	13.4	40.7	25.2	100.0

表 4 到着時の気持ち (程度別)

	心強かった	助かったと思った	はずかしかった	不安が高まった	そ の 他	計
軽 症	87 (52.7)	45 (27.3)	16 (9.7)	6 (3.6)	11 (6.7)	165 (100.0)
中 等 症	93 (65.0)	34 (23.8)	5 (3.5)	1 (0.7)	10 (7.0)	143 (100.0)
重症以上	18 (62.1)	6 (20.7)	3 (10.3)	0 (0.0)	2 (6.9)	29 (100.0)

表5 現場出発までの時間（回答時間－実時間）

	実際の時間より短い回答		実際の時間と同じ回答	実際の時間より長い回答		計
	－3分以上	－2分以内	±0分	＋2分以内	＋3分以上	
実数 (人)	242		21	74		337
	168	74		39	35	
比率 (%)	49.8	22.0	6.2	11.6	10.4	100.0

表6 病院到着までに要した時間差（回答時間－実時間）

	－5分差以上	－4分差	0分差	＋4分差	＋5分差以上	合計
傷病者	6 (7.2)	14 (16.8)	13 (15.7)	37 (44.6)	13 (15.6)	83 (100.0)
関係者	13 (5.2)	45 (17.7)	33 (13.0)	109 (42.9)	54 (21.2)	254 (100.0)

表7 病院到着までに要した時間差（程度別）

	－5分差以上	－4分差	0分差	＋4分差	＋5分差以上	合計
軽症	8 (4.8)	25 (15.2)	30 (18.2)	79 (47.9)	23 (13.9)	165 (100.0)
中等症	8 (5.6)	30 (21.0)	15 (10.5)	56 (39.1)	34 (23.8)	143 (100.0)
重症以上	3 (10.3)	4 (13.8)	1 (3.4)	11 (37.9)	10 (34.6)	29 (100.0)

ついてどう思いましたか」という質問に対する結果を、初診時程度別について分析した結果を示したものである。

「心強かった」と感じている者は、軽症者よりも中等症者、重症者に多く、また、「助かったと思った」という回答は、軽傷者に若干多い。しかし、いずれの傷病者等の回答も、「心強かった」、「助かった」と感じている者がほとんどである。

(2) 救急処置時の傷病者等の意識

表5は、救急隊が実際に要した時間と傷病者等の回答した時間とを比較した結果を示したものである。実際の時間よりも長く感じていた者より短く感じていた者が多く、現場で救急隊員が救急処置を行っているのを見守り

ながら待っている気持ちは、実際よりも短く感じていることが認められる。

(3) 救急搬送中の傷病者等の意識

表6は、傷病者・関係者の感じた時間と、実際に要した時間との差を分析した結果である。病院に到着するまで遅く感じている者が多く、さらに関係者の方が、傷病者よりも遅いと感じていることがうかがえる。

表7は、初診時程度別にさらに分析した結果を示したものである。重傷者ほど、救急車が病院に到着するまでの時間を長く感じている傾向にあり、統計上の χ^2 検定の有意差5%レベルで関連性が認められた。

以後、有意差の認められた場合は、「 $p < 0.05$ 」と示す。

表8 救急隊員の行った行為と救急隊員の印象

	愛情のこもった態度	落ち着いたしぐさ	頼もしい態度
励ましの言葉	<u>0.000</u>	0.221	<u>0.024</u>
安心させる言葉	<u>0.000</u>	0.965	0.303
手を握ってもらった	<u>0.000</u>	0.06	<u>0.021</u>
衣服をゆるめてもらった	<u>0.000</u>	0.101	<u>0.003</u>
話を聞いてもらった	<u>0.000</u>	0.356	0.306
頼りがいのある言葉	<u>0.002</u>	0.526	<u>0.012</u>
汗・涙等をふいてもらった	0.418	0.183	0.112
病院到着までの時間を知らされた	<u>0.000</u>	<u>0.041</u>	0.093

注 数字は上側確率値を示す $p < 0.05$ 有意差有り $n = 337$

(4) 救急隊員の印象

ア 救急隊員の行った行為

表8は、救護にあたった救急隊員が行った「励ましの言葉」、「安心させる言葉」、「手を握ってもらった」、「衣服をゆるめてもらった」、「話を聞いてもらった」、「頼りがいのある言動」、「汗・涙等をふいてもらった」、「到着までの時間を知らされた」という各行為について、「うれしかったことには○」を、「物足りなかったことには×」をつけて下さいという質問と、救急隊員の印象についての関連性をみるため、統計上の χ^2 検定の有意差判定で分析した結果を示したものである。

各項目のほとんどにわたり、傷病者等は「愛情のこもった態度」と関連性が認められ、「落ち着いたしぐさ」では、「病院到着までの時間を知らされた」という項目に関連性が認められ、また、「頼もしい態度」では、「衣服をゆるめてもらった」項目に強い関連性が認められる。

イ 愛情のこもった態度

表9は、愛情のこもった態度について、さらに詳細に関連性を統計上の χ^2 検定の有意差判定でみたもので、有意差の認められた項

表9 愛情のこもった態度と関連性の認められた項目

	愛情のこもった態度
性別	<u>0.022</u>
希望どおりの病院へ搬送	<u>0.035</u>
通報から到着までの時間	<u>0.003</u>
救急活動への関心度	<u>0.006</u>
到着までの時間を知らされた	<u>0.002</u>

注 数字は上側確率値を示す
 $p < 0.05$ 有意差有り $n = 337$

表10 救急活動への関心度

	関心があった	関心がなかった	合 計
会社員	71 (58.2)	51 (41.8)	122 (100)
主婦	61 (62.2)	37 (37.8)	98 (100)
自営業	25 (71.4)	10 (28.6)	35 (100)
公務員	20 (74.1)	7 (25.9)	27 (100)
学生	7 (33.3)	14 (66.7)	21 (100)
その他	25 (73.5)	9 (26.5)	34 (100)

目は、「性別」、「希望どおりの病院へ搬送」、「通報から到着までの時間」、「救急活動への関心度」、「到着までの時間を知らされた」であった。

表11 行為の意識に対する比較（和らげるため）

	救急隊員側		傷病者側
	隊長 (一致)	隊員 (一致)	
励ましの言葉 (人)	186 (104)	137 (69)	166
安心させる言葉 (人)	236 (138)	184 (114)	194
汗・涙等をふいてあげた (人)	15 (2)	13 (3)	30
衣服をゆるめてあげた (人)	31 (5)	15 (2)	57
頼りがいのある言動 (人)	72 (40)	45 (26)	172
病院までの時間を教えた (人)	104 (43)	94 (36)	97

(5) 救急活動への関心度

表10は、ふだんからの救急活動への関心を、職業別に関連性をみた結果を示したものである。

自営業、主婦、公務員に救急活動への関心が高く、また学生では関心が薄いという傾向が認められる。(P<0.05)

(6) 救急隊員の意識（搬送中に行った行為）

表11は、救急隊の隊長、隊員に対して、搬送中、傷病者の心を和らげるために行った行為を傷病者等はどのように受け止めていたかについて分析するため、傷病者等の回答と比較したものである。

心を和らげるため「励ましの言葉」をかけた者は、隊長で186人、隊員で137人であり、傷病者等で「励ましの言葉」をかけてもらい「うれしかった」と回答している者は166人

いた。

ここで、傷病者等の意識と救急隊員の意識が一致しているかをみると、隊長が傷病者に「励ましの言葉」をかけた186人の事象のうちで、傷病者等も「うれしかった」と回答した事象は上記166人中、104人であった。同様に隊員では69人であった。

このことから、救急隊員が無意識に行っていることでも、傷病者等にとってはうれしいことであり、また、救急隊員が心を和らげるために行っているにもかかわらず、傷病者等からすると、必ずしもうれしいと感じていないことがあることもわかる。

ここで、表において、隊長の回答数が隊員よりも多いのは、傷病者に接している時間が長いためと考えられる。

3. おわりに

救急隊員は複雑化する救急事象に対応するため、救急処置技術を駆使し、救急現場に臨んでいるが、同時に住民に対する信頼感や使命感から救急現場では適正な行動をとらなくてはならない。このように救急隊員は、傷病者や関係者との対応も大切であることから、今回傷病者等の意識を調査したものであり、調査結果のうち、傷病者の対応以外に、同乗関係者も傷病者と同じ意識状況下にあると推測され、今後の救急活動では、関係者を含めた傷病者等への対応に留意しなければならないと考える。